

教育厚生委員会 県内調査活動状況

1 日 時 平成26年1月31日(金)

2 出席委員(8名)

委員長 白壁 賢一

副委員長 塩澤 浩

委員 中村 正則 前島 茂松 山下 政樹 大柴 邦彦 望月 利樹

小越 智子

欠席委員 高木 晴雄

地元議員 (甲斐市)山田 一功 議員 保延 実 議員 木村 富貴子 議員

(大月市)棚本 邦由 議員(議長)

3 調査先及び調査内容

(1)【乳児院ひまわり】

調査内容(主な質疑)

問)職員は何人いて、子供たちの年齢にあわせてどのような体制をとっているのか。

答)職員は理事長、施設長のほかに保育士が6名、看護師が2名、主任の保育士が1名、栄養士1名、調理員3名、ファミリーソーシャルワーカー1名、個別対応職員1名、事務職員1名、小規模グループケアの管理棟職員2名、総勢20名である。普段は2つの小規模グループケア棟で生活をしており、平日は保育園のように本館・小規模ユニット棟へ通うが、土日は小規模グループケア棟で過ごしている。

年齢にあわせた体制については、乳児5名の授乳の時間や離乳食を食べる時間がほぼ同じ時間帯であるため、臨時のアルバイトを雇い対応している。幼児3人は少し早いのだが幼稚園に通っている。

問)定員10人の子供たちに対して職員が20名というのは、厚めのケアを取っていただいていると思うが、職員が苦勞している点は何か。また、児童相談所や母親がいる地元との連携はどのように行っているのか。

答)新設の施設であり全てが初めてのことばかりであるため、その都度職員と協議しながら

対応しているのが現状である。マニュアルを作成して実行しているが、状況によって変更することが多い。この施設の理念はチャイルドファーストであるため、子供の動きに合わせて、職員の勤務形態も変えている。

一番苦労している点は、子供を早く家庭に戻すにはどうしたらいいかということで、施設で受け入れるときは割と簡単であるが、戻すのは非常に難しい。この施設の子供たちの8割近くは虐待を受けた子供たちで、母親も虐待をした自覚や反省もない。自分の子供だから何をしてもいいという考えを変えていくことは、この施設だけでは解決できない問題なので、児童相談所とも協議しながら対応している。施設の方針としては家庭へ戻すことが無理な場合は、里親へ出すことが第一なのだがこれがなかなか難しい。家庭へ戻すときには、市町村の要保護児童地域対策協議会で個別会議を開いて、市町村と児童相談所と民生委員と保育所と施設でよく協議し、それぞれの役割分担を決めて退所後の支援体制をつくっている。



説明・質疑の後、施設内の視察を行った。

(2)【やまびこ支援学校】

調査内容(主な質疑)

問) やまびこ支援学校には、いろいろな障害を持った児童・生徒がおり、中には車いすの方もいると思うが、校舎内には坂も多く対応が難しいのではと思う。校内のバリアフリー等の安全対策はどのように行っているのか。

答) やまびこ支援学校のバリアフリーの状況については、平成 14 年にエレベーターを設置し、平成 21 年には渡り廊下、スロープ、手すり等の工事を行っている。

答) 学校でも安全については最大限の配慮をしている。例えば屋外道路を車いすで移動する場合には複数の職員が付き添っている。また、斜面を移動する場合には、子供が車いすから落ちないように後ろ向きにしている。他にも安全確保のルールを職員に徹底するとともに、ヒヤリハットの事例も積み重ねている。

問) 昭和 54 年の開校から約 35 年経過しているため、校舎等の建物の老朽化が進んでいると思うが、その対策は。

答) 施設の老朽化への対策としては、小修繕の予算の範囲の中で対応している。具体的には今年度は劣化したプールの塗装、前年度は天井の吹きつけ材の修理である。

問) 開校当時とは異なり障害も多様化、重度化していると思われるが、学校教育上の配慮や工夫などはどのように行っているのか。

答) 教育課程については、類型化して障害の特性に合わせた学習グループを編成している。個々の能力を引き出すために、個別学習と学部・学年を超えた集団学習を組み合わせている。具体的には、児童・生徒の実態に応じた各教科の学習、運動会、児童・生徒会活動、学園祭等の活動を行っている。医療的ケア対象児童については看護師 1 名が配置されている。学校給食に関しては、児童生徒の実態に合わせた食事を提供している。

問) 高等部の就職率が 100%とのことだが生徒や保護者の希望と合った就職になっているのか。

答) 進路に関わる最近の課題は、東部地域の福祉施設の数が少なく、各施設の定員がいっぱいになりつつあることである。特に、重度の子供たちの進路先が東部地域に少ないため、他圏域や近隣の生活介護施設を複数利用する生徒もある。このような状況を改善するために、産業現場見学の実施や地域と連携して市町村福祉課等と相談しながら卒業後の進路

先を確保している。一般就労先の開拓については、管理職が率先して行っており、今後もさらに力を入れていきたい。

問) 通学区域が広範囲にわたるが、どのように通学し、時間はどのくらいか。

答) スクールバスが 68 名、保護者送迎が 8 名、自主通学が 12 名、訪問教育が 1 名である。通学時間は最大で 60 分である。

問) 重複障害者の子供がいるため、医療的なケアが必要な場合もあると思うが、連携している病院はどこで、時間的にはどのくらいで対応可能なのか。

答) 連携先の病院は都留市立病院で、救急搬送には約 20 分かかる。

問) 20 分はかなりの時間と思う。私の地元にあるかえで支援学校では、障害者の方も地域の中で一緒に育っている。重度障害者の対応を考えると支援学校は市街地にあった方がよいと思うが、やまびこ支援学校を移転する計画についての検討はどのように進んでいるのか。

答) やまびこ支援学校は、平成 23 年 7 月に策定した「山梨特別支援教育推進プラン」では、老朽化と肢体不自由の生徒への配慮から将来的な整備の方向について検討を進めている。同プランは平成 32 年までを計画期間としており、これまでふじざくら支援学校の増築を終え、わかば支援学校の改築などに着手したところである。やまびこ支援学校についても、順次計画を進めていきたいと考えている。

問) 就職先での定着率はどうなのか。

答) 就職率は 100% であるがそれぞれ障害の状況により、途中で仕事を続けられない生徒もいるため、卒業後 3 年間は追指導を行っている。

問) やまびこ支援学校の改築についてもう一度だけ伺いたい。

答) 議員の発言も踏まえて、今後も検討していきたい。

答) 議員からの、そして地元からの熱い要望として重く受け止めている。「山梨特別支援教育推進プラン」に基づき、地元の方々が満足していただける改築ができるようこれからも誠心誠意努めていきたい。



説明・質疑の後、校舎内の視察を行った。

以上